

白髪一雄について

こんにちは！ ボクは「カズオ」。
昭和初期の、旧制尼崎中学校に通う2年生！
白髪一雄と尼崎について紹介します。



学生時代の白髪一雄

1924（大正13）年、尼崎市の呉服商・木市呉服店の長男として生まれる。幼少時より絵を描くことが好きで、父親が趣味で描いていた洋画に関心を持つようになる。

市立第三尋常小学校（現：市立明城小学校）に入学。その後、新設された市立竹谷小学校に編入して卒業。県立尼崎中学校（現：県立尼崎高等学校）の在学時に絵画部に入ることが画家を目指すきっかけとなり、京都市立絵画専門学校（現：市立芸術大学）に進学して日本画を学んだ。

ボクは、この少年時代の白髪がモデルのキャラクターです。愛読書は中国の歴史物語です。



着物姿の白髪一雄 1986年

京都市立美術専門学校（1945年改称）を卒業後、洋画に転向して風景や人物画を描き始めたが、新しい絵画表現を求めて、天井から吊るしたロープにつかまり、床に広げたキャンパスの上に絵具を置いて縦横無尽に素足で描く「フット・ペインティング」という独自の方法を編み出し、国際的に高い評価を得た。

生涯にわたり尼崎で暮らし、市内のアトリエで、妻・白髪富士子〔1928-2015〕と共に50年以上に及ぶ画業を歩んだ。2008（平成20）年、尼崎にて逝去。

画家・吉原治良をリーダーとする前衛美術グループ「具体美術協会」では結成翌年の1955（昭和30）年に会員となり、解散する1972（昭和47）年まで、中心的なメンバーのひとりとして活躍しました。



足で描く白髪一雄 1963年

「具体」は、『人の真似をするな。今までにないものをつくれ』というリーダー・吉原治良の厳しい指示のもと、会員たちが自由な発想で新しい表現を次々に生み出しました。



アトリエで使用されていたロープや絵具の溶き缶

作品でたどる白髪一雄の画業

画家として歩み始めた白髪は、まず生まれ育った尼崎をはじめ大阪・京都・神戸など身近な風景を描いた。



《尼崎出屋敷と茂川》1948年



《阪神庄下川阪神尼崎》1948年

もともと油絵具を好んだ白髪は本格的に油彩画を描き始め、作風は抽象的な表現に変わっていく。



《本能の結集》1952年



《流脈Ⅰ》1953年

20代の後半、白髪は初めて素足で描く絵画を試みた。1954（昭和29）年当時は奇想天外な描き方と受け止められたが、やがて絵画の可能性を切り開いた表現方法として認められるようになった。全身を使って描かれた作品の生き活きとした力強さは、時代を超えて観る人の心を揺さぶる。



《天富星撲天雕》1963年

若い頃の作品は赤と黒を基調とした暴力的とも感じられる力強さが際立つが、仏教に帰依（きゑ）し、修行をした50代以後の作品には、身体的のみならず精神的な強さ加わり、円熟した表現となった。



《群青》1985年
尼崎市教育委員会蔵
(その他の掲載作品は全て尼崎市所蔵。)



《天女の舞い》1999年

晩年には、色鮮やかでおおらかさをもった作品が加わり「フット・ペインティング」の豊かな世界が展開された。

尼崎の歴史～近代までのダイジェスト～



★ 尼崎沖より六甲山を望む（大正4年頃）
出典「御大典記念献上尼崎市写真帖」



★ 解体前の尼崎城（明治初期頃）

「あま（尼）」という言葉は、古くは漁民・海民を意味していた。また、「さき（崎）」は岬にも通ずる言葉で、「漁民・海民が住む海に突き出た土地」というのが、地名の由来と考えられる。

奈良時代にはすでに港、漁村として発展し、平安時代の末頃には瀬戸内海を通して西国から都へ輸送されるさまざまな物資が往来し、なかでも京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として栄えた。

江戸時代初期、大坂が幕府の西国支配の最重要拠点となると、その西にある尼崎には西の守りの要の地として、尼崎城が築城された。城の南には大坂から西国へと通じる中国街道が通り、城下町として栄えた。当時の尼崎は、大坂近郊にある流通の発達した先進地であり、漁業に加え農業の面でも綿や

菜種といった商品作物が盛んに生産された。明治時代に入ると、政府の廃城令により尼崎城は取り壊されて堀も埋め立てられ、その跡地には市庁舎や学校などが建てられた。城跡の本丸部分には小学校（現：市立明城小学校）、北側部分には高等女学校（現：市立歴史博物館）が開設された。

2018（平成30）年、西三の丸があった場所に再建された尼崎城では、このような尼崎の歴史を学ぶことができる。

画家を育てた昭和の尼崎の町は……



★ 『ダンス時代』第2巻第7号 尼崎ダンスホールの広告
1934（昭和9）年頃（部分）



白髪一雄が幼少期を過ごし刺激を受けた昭和初期の尼崎は、城下町の風情を残しつつ、阪神間で花咲いたモダンイズムの雰囲気も併せ持つ町だった。実家の「木市呉服店」があった本町通商店街（下図）は、小売店・飲食店・銀行・芝居小屋・映画館などが軒をたらし、阪神間随一といわれ賑やかなところだった。

第二次世界大戦末期の1945（昭和20）年、本町通商店街は家屋疎開の対象となり消滅。戦後、白髪の父・白髪信次郎を含む有力商店主らの尽力により、現在の中央商店街（下図）に復興を果たした。

白髪は美術専門学校を卒業後、呉服屋の夜間の店番を手伝いながら、2階をアトリエとして使った。30歳のころ、足で描く独自の技法を確立して以降、この地で多くのフット・ペインティング作品を生み出した。店舗は1982年に閉店し、現在は、新しくなったビルの壁面に「木市呉服店跡」のプレートが設置され、往時をしのばせている。

▲「木市呉服店」の屋号紋。屋号は祖父のルーツである材木屋に由来している。

本町通商店街



★西本町商店街
1938（昭和13）年頃

中央商店街



★中央商店街：神田中通3丁目から西を望む
1953（昭和28）年頃



尼崎大防海堤完成記念 祝賀時代行列に参加する白髪（木市呉服店前）1954年

白髪一雄と尼崎の記憶

白髪一雄が幼少期を過ごし刺激を受けた昭和初期の尼崎は、自然があり、尼崎城の城壁の一部も残っているなど、城下町・漁師町の名残と風情ある街並みだった。実家近くの貴布禰神社（通称「尼のきふねさん」）で行われる『けんか祭り』と称される夏祭りは当時、大きな掛け声とともに山車が勢いよくぶつかり合い、ときに担ぎ手の血しびきが飛び散ることもある激しいものであった。その記憶は、幼少の白髪の脳裏に焼き付き、やがて大画面の中で展開される、血しびきのような絵具の躍動感へとつながっていった。

晩年の白髪は、「わたしが子どもだったころの尼崎、高度成長期の尼崎、現在の尼崎、それらすべての時代に見たもの、感じたものが、わたしの絵に影響していることは間違いありません」と語っている。

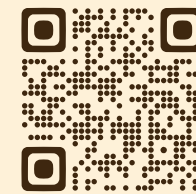
ボクが4～5歳のときに見た、夏祭りが忘れられない……。近くの劇場のチャンバラ映画や歌舞伎にも夢中になったなあ。将来の夢は、画家が歌舞伎役者だったなあ。



「白髪一雄ゆかりの地をめぐるマップ」WEB版もあります!!

パソコンからも閲覧可能です。
www.archaic.or.jp/shiraga/map/

動画でめぐる「ゆかりの地」ツアーやオンラインマップをご覧ください。



白髪一雄生誕100年記念事業 関連企画

ゆかりの地5箇所（1・2・3・4・8）をめぐる、ロゴステッカーがもらえるイベントを期間限定で実施します。

実施期間：2024年7月27日～9月23日まで。
参加方法：①「ゆかりの地をめぐるマップ」ウェブサイトにて、対象スポットの詳細を確認。②設置されたQRコードをスマートフォンで読み込むと、WEBにスタンプがたまります（廻る順番はどこからでも可能）。③全て集まったら、白髪一雄記念室の受付スタッフに画面をご提示いただくと、ステッカーをプレゼントします。※通信にかかる費用はお客様の負担となります。
※白髪一雄記念室は火曜日休館、開館時間は10:00～17:00（入館は16:30まで）。



▲生誕100年記念ロゴ